九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

もものものがたり

いぬに
新短歌人連盟同人 | 芸術と自由社同人

https://doi.org/10.15017/20623

出版情報：地域健康文化学論輯. 2, pp.25-39, 2010-03-31. Japan Institute for Community, Health, and Culture
バージョン：
権利関係：

もものものがたり

いぬに

作者はある日、山の中でももと出会いました。ももの目をみているうちにこのものがたりが浮かんできました。何度も山に足を運んだり、人に尋ねたり、いろいろ調べたりしながらこのものがたりを創りました。いまではももと子どもたちの幸せだけを祈っています。

一　五郎兵衛山村のもも

そこは穏やかな谷あいの村でした。村といっても十軒足らずの農家が谷の急な斜面にこつこつと長年かけて石垣を積んで段々を作り、寄り添って暮らしている小さな集落でした。

この村の名前は、五郎兵衛山村（ごろべえやまむら）といいました。今から数百年の昔、戦国時代の戦乱を避けて五郎兵衛さんが貧しい人たちのために拓（ひら）いた山の村だということで五郎兵衛山村と呼ばれていました。

村の南の外れ、小高い山の斜面に、五郎兵衛神社という小さな祠がありました。五郎兵衛さんのお墓だと伝えられ、神社ができたときに植えられたといわれる数本の巨大な楠が空に向かって大きな枝を伸ばし、そのおかげで境内は、夏は涼しく冬は暖かく、訪れる人々を癒していました。

この神社には、村で困ったことが起こっても、五郎兵衛さんにお願いすればなんでも助けてくれるという言い伝えがありました。村人たちはいつもみんなと仲良く暮らしている犬たちを連れてお参りしていました。「丈夫なこどもがさずかりますように。」「孫が希望の学校に合格できますように。」などとお願いすると、不思議なことに必ずほんとうに願いは叶うのでした。

神社の周りにはお礼のお花やお供え物が絶えず、また、お礼にと植えられたカラタチやシャガなどがきれいに手入れされて、緑の植え込みを作っていました。なかでも白い縞のあるシャガは、うす暗くなると道しるべのように薄青く足元に浮かびあがるのでした。

標高千メートルの連山の、肩あたりの盆地の村で、都会からくねくねと上ってきて反対側の町に下る一本の道路がただひとつの外の世界との連絡線でした。夏はとても涼しく、ふもとの都会の人達が大勢遊びに来ます。村では、どこよりもおいしい豊かな湧き水を利用して、都会の人達のために豆腐やアイスキャンディを作って売っていましたが、それも夏だけ、冬になれば村を訪れる人もなく、道路は凍りつき、ひとびとは助け合ってお正月を迎え、じっと堪えて春を待つのでした。それだけに春の楽しさ、美しさは特別でした。

村には多くの犬や猫が住んでいました。それぞれの広い敷地の納屋や物置や床下を自由に出入りして、すべての犬や猫は村人みんなの共有の友達でした。人も犬も猫も、みんな共に理解しあい支えあって仲間のように暮らしていたのです。なかでも犬たちは人々によくなつき、村全体の土地を自分たちで分け合って、自分自身が受け持った土地を守る番犬

として生き生きと働いていました。
山奥の村ですから、ふもとの都会のような事件はありませんが、何年かに一回くらいは、畑を荒らしに来たイノシシを追い払おうとした犬が牙にかけられて死ぬようなこともありますし、生まれた仔猫がタヌキやタカやカラスなどの山の動物たちに食べられることもありました。平和な村にも生きていくための戦いはあり、それはそれぞれの動物にとって大切なことでした。
道路から少しわきに入った広場のそばの低い石垣の上には一人のおばあさんが住んでいました。齢をとってからだが不自由になったおばあさんの家がみんなの寄り合い所になったのはもう十年も前でした。村の若者がみんな町に出て高齢者ばかりになったのでだれからともなくこの家でおばあさんを助けながらみんなでおしゃべりするようになったのです。
石垣で小高くなったおばあさんの家の敷地には、他の家と同じように野菜畑が作られ、梅やユズやミカンの木などが植えられて、梅から順番に、季節に沿って、香り高い花を咲かせるのでした。
なかでもみんなが大好きだったのは一本の桃の木でした。梅の花が終わるころ、ちょうどこれからぐんぐん暖かくなるという時期に一斉に咲く赤紫色の桃の花は、下界の暖かい庭で育ったよりはずっと濃い、耐えた密度の豊かさを表しているような色でした。時代遅れだけどおばあさんが大切に手入れしているタイル張りのかまどに薪の火を入れ、うるち米を炊いてぼたもちを作りました。それから、この桃の木の下にござを敷き、火鉢でお茶を沸かしながらみんなでお花見をするのでした。
ももが住んでいたのはこのおばあさんの家の土間でした。真っ白な毛の短い中型の日本犬の女の子です。細面がかわいい、つぶらな瞳でヤギのように耳の大きな、活発な犬でした。生まれたのが春先、ちょうど桃が盛りで、誰がいうともなく「もも」と呼ばれるようになりました。「もも」と呼びかけると、首を傾けて真ん丸い目をいっそう大きく見開いて、それから小躍りして駆けてきて、赤い舌を少し出して笑い顔で跳びついてくるのです。
ももはしっぽを振るのに特徴がありました。右巻きに巻いたしっぽを水平に回すように振るのです。それがかわいいと、みんなはももを撫でてくれました。賢く、そしてがんばりやさんという評判の犬でもありました。
そんなふうに、ももは、おばあさんの家を訪れるひとみんなに愛されていました。お花見の時などは、輪になった人々のそばに寝そべって、古いかまどでゆでられたおいしい豆腐を貰って食べるのが幸せでした。ほかの犬たちも集まってきては、みんな村人に撫でてもらい、気が付けば大勢の犬たちが宴会のござを取り囲んで寝ているのでした。

二　平和な村の大事件

夏も過ぎようとするある日のことです。村に異変が起きました。
家々の前に大きなトラックが止まり、すべての荷物を運び出し始めたのです。きれいな水の豊かなこの村の地形が、水を溜めるのにふさわしいと、大量の水を使うふもとの都会の人たちに水を送るためのダムが建設されることになったのです。五郎兵衛山村はすっぽり水の底に沈むことになり、人々は立ち退かねばならなくなりました。

犬たちは、いつもだったら、駆け寄っていくと笑って頭や背中を撫でてくれる村の人たちが、怖い顔をしてトラックに荷物を積み込み、それでも寄っていくと、「じゃまじゃま。」と追い払うのが、なぜだか分かりませんでした。犬たちは知らず知らず、自分が悪いことをしてしまったのだと思い込み、しゅんと頭を垂れるのでした。

大変なことが起こっている、でも何が起こっているのか分からずに悲しみに沈む犬たちに混じって、ももは次々に去っていく人々を見守るばかりでした。

村の人たちは、もちろん、犬や猫を連れていこうとしました。少しでも連れて行ける人は連れて行きましたし、たくさんの動物たちを引き受けた人もいましたが、それでも数多くの生き物は残されてしまいました。特に猫は土地になつく生き物で、連れて行っても行方不明になるとかで、多くは置き去りにされました。

人々にこの村の代わりに与えられたのは、町の中の近代的な住宅や都心の高層マンションでした。ももが住んでいた家のおばあさんなどは、立派な養護施設に入ることになりました。どれも新しく、都会の中心の便利な場所にあり、年老いてしまった村人たちは、村を出て都会に就職していった息子や娘たちのすぐそばで暮らせるのでしたが、動物を飼えるスペースはありませんでした。犬や猫たちはこれまでも村で自由に生きてきたのだから、きっとどんなになっても生きていくだろう、と、村人たちはあえて心を鬼にして、目を泣き腫（は）らして、生き物たちを見棄てたのです。そうしないと村人たちも生きていけなかったのです。

人々が去ってしまうと、村から食べ物が無くなりました。餌を求めて、犬や猫たちは山の中にちりぢりに散っていきました。なかにはふもとの村までたどり着いて優しい人に保護されるものもいましたが、多くは森の中で食べるものも無く倒れて、キツネやタヌキなど野生の動物たちの餌食になりました。あんなに仲良く暮らしていた動物同士は、お互いが生きるために弱いものを食べました。小さな猫は少し弱っただけでカラスに真っ黒にたかられてつつかれ、内蔵を引きずり出されて死んでいきました。村人たちがいなくなってカラスの食べ物も無くなり、弱くやせ細ったカラスは木陰に倒れて他の動物に食べられてしまいました。毎日毎日がすべての生き物にとって死に物狂いの戦いでした。

この村からは次第に生き物が消えていきました。

それでも、ももは村を出て行くわけにはいきませんでした。ももを連れて行こうとする人もいましたが、恐怖心でいっぱいのももは、牙をむいて抵抗しました。

なによりも、ももものおなかには赤ちゃんがいたからなのです。身重な体で村を出て行くのは不安でした。せめて少しでもなじみのあるこの村で赤ちゃんを産まなければならないと思いました。

空になった家々はすぐに取り壊しが始まりました。百年以上たった大きな家々が、毎日毎日ばりばりと壊されていくのを見て、ももはいっそう怖くなりました。

助けを求めて、ももは五郎兵衛神社に走りました。

「きっと助けて貰えるに違いない。」

ところがももの目に映ったものは、神社のあった場所にぽっかり開いた大きな穴と、こなごなに壊れた瓦に混じって、ブルドーザーにずたずたに踏みにじられた、シャガやカラタチや、草花の残骸でした。

何もかも信じられなくなって、ももの胸は深い淵に沈みました。

これからどこで赤ちゃんを産んで、どのように育てようか。ももは高台から、壊れていく村を眺めながら、おなかが空いたのも忘れて、日が暮れるまで立ちすくんでいました。

翌朝からもものねぐら探しが始まりました。
ももが住んでいた敷地は、山の斜面に築かれた段々の下のほうでしたが、空になった村の敷地の少し上に、石垣の傍に台風で倒れた大きな杉がふさいでいる場所がありました。ももはそれを思い出して、壊れた材木や瓦をかき分けて行ってみました。ほどよく草が茂り、しばらくは住めそうです。
ももは口や前脚で草を集めて丸く寝床を作り、疲れた身をそっと置きました。横なぐりの雨が降ればずぶぬれになるのですが、それ以上よい場所は見当たりませんでした。
それからは、また、食べ物探しの毎日でした。これまではだれかれとなく毎日餌を与えてくれていたのに、人がいなくなった村では誰も餌を与えてくれません。壊され、運び去られていく家々の残骸の下に残された食料を求めて、瓦礫の中に潜り込み、少しでも食べられそうなものがあれば引きずり出して食べました。他の動物たちが共食いをして食べ残した手足や頭蓋骨も、つらい気持ちを我慢して食べました。
豆腐屋さんが壊された跡には、大きなコンクリートの水槽におからがたくさん残っていました。少し腐っていやな匂いがしましたが、ももは一生懸命食べました。そうしないと餓死してしまうのです。おなかの赤ちゃんが育つためなら、ももは何でも食べるつもりでした。

やがて秋も過ぎ、ススキの穂が白く輝く、空が真っ青な日に、ももはおかあさんになりました。四頭の赤ちゃんが産まれたのです。

赤ちゃんが産まれそうになったとき、ももは急に不安になりました。初めての出産なのです。でも、ももはひとりで生まなければなりません。食欲がなくなったかと思うと少し寒気がして急におなかが痛くなりました。いよいよ陣痛がきたのです。こんなとき誰かそっと背中をさすってくれると楽になり落ち着くのですがももはひとりぼっちです。空腹で栄養が足りなかったので産む力も無かったのですが、歯を食いしばって産みました。
はじめのこどもがかぶって産まれた薄い膜を、ももが急いで舐めて破ると赤ちゃんはひゃんと声を上げました。へその緒を噛みちぎる間もなく、すぐにおっぱいに口を寄せてくるのです。ももは暖かいものが胸いっぱいにあふれてくるのを感じました。
でも、ゆっくりしているひまはありません。十分もすればすぐ次のあかちゃんが産まれてきます。ももは夢中になって次々にこどもを産み、ていねいに舐めてあげました。誰に習ったこともなく誰にも見守ってもらえませんでしたが、心をこめて世話をしました。
ももは幸せでした。かわいいこどもたちが熱くほてった体を自分のおなかに寄せて、ひくひくと並んでおっぱいを飲んでいるのです。

産まれたばかりはみんな同じように見えましたが、数日すると少しずつ特徴が見えてきました。
一頭めは、白い毛に黒い毛がまだらに混じった大きな男の子でした。

二頭めは、ももと同じ真っ白な色の活発な男の子でした。
三頭めも、真っ白な少しおっとりした男の子でした。
四頭めは、こどもの頃のももとそっくりの、真っ白な女の子でした。
ももは一頭一頭のへその緒を噛み、力を振り絞って切ってあげたのですが、最後の四頭めの時、疲れから目の前が真っ暗になり、少し噛み残してしまいました。
「女の子なのにおへそが出てしまってごめんね。」と、ももはあとあとまで謝ったのでした。

ももはあいかわらず空腹でふらふらでしたが、赤ちゃんたちはもものおいしいおっぱいを飲んですくすくと育っていきました。
はじめは、芋が転がっているようでしたが、目が開き、耳が大きくなり、だんだん犬の仔らしくなってきました。鉛筆のようなしっぽをちぎれるように振って、もものおなかにもぐりこんできます。
ももは、毎日食べ物探しに走り回っていましたが、こどもたちの成長を見つめながら、みんなの体を舐めてあげるのが楽しみでした。
「なにもかも信じられなくなったけど、このこどもたちのいのちだけは信じられる。」
ももはその時だけは、優しい気持ちになれました。

でも、ももはやはり心配していました。
このススキが枯れてくると、山には冷たい雪風が吹きすさぶのです。これまで雨の日は、こどもたちに覆いかぶさって守ってきましたが、ももの小さな体では寒さと吹雪をどれだけ防ぐことができるでしょう。
飢えていっそう凶暴になったカラスも心配でした。思えばカラスたちもかわいそうなのですが、他の犬猫があらかた死に絶えた今、カラスの群れは明らかにももたちを狙っていました。仔犬たちを石垣の陰に隠して、ももが餌を探しに走り回っていると、カラスはすっと急降下してももの目を狙います。ももはジグザグに緩急をつけて走り、物陰に身を低くしてカラスの襲撃を避けました。このような技が出来ない生き物は一匹ずつ食べられていきました。

途方にくれている時に、さらに大事件が起こりました。
ちょうどももたちが住んでいるすぐ横に、ブルドーザーが大きな道を作り、その日から大きな工事が始まったのです。それはダムの水を溜まりやすくするための巨大な土盛りを作る工事でした。
ももの住み家にも、赤土や泥や岩ががらがらと降ってきます。ももはこどもたちをくわえてどこかに避難しようとするのですが、すでにこどもたちはくわえるには大きすぎました。かといって遠くまで歩いて逃げる力はまだありません。おびえて固まってぶるぶる震えるだけでした。
どかーんと耳が潰れるような激しい発破の音がして、大きな岩が吹っ飛んできました。ももたちの住み家は半分埋まってしまいました。仔犬たちは急にぎゃんぎゃんと泣き叫び始めました。

その時です。人間の大きな声がしました。
「待て。犬がいる。」
それは工事現場の作業員の声でした。
ダンボールの箱がすみかのすぐ脇に置かれ、仔犬たちはあっという間に数人の作業員たちによってその中に放り込まれてしまいました。
「こどもたちにさわるな。」
ももはそのうちの一人に力いっぱい噛みつきましたが、逆にだれかにすっぽり布の袋をかぶせられ、そのまま吊り上げられてしまいました。
どさっと放り出されて、ももが袋から這い出してみると、そこは、今まで住んでいたところの少し下、あの優しいおばあさんたちと暮らしていた道路脇の石垣のそばでした。仔犬たちを入れたダンボール箱も傍らに置かれ、おなかを空かせたこどもたちはきゃんきゃんと泣いていました。
痛むからだを寄せておっぱいを含ませながら、ももは考えていました。
「自分を痛めつけたあの人たちは、本当はこどもたちを救ってくれたのではないだろうか。」と。
でも、ももはすぐに首を振りました。
「人間を信じてはいけない。だって、この平和で美しい村を廃墟にしてしまったのは人間なのだから。」
ももはいっそう悲しくなりました。
屋根も無く、吹きさらしのこの場所で、どうして生きていけばよいのでしょう。ただひとつ救いだと思ったのは、この場所が、以前ももが楽しく暮らしていたところだということでした。そのころからわずか数ヶ月、見るかげもなく崩れ果ててはいましたが、ももは決心しました。
「この土地をひとりで守ろう。こどもたちのためにも。」

三　餓えや寒さとの闘い

山の夜は本当に真っ暗です。見上げれば墨のような空にたくさんの星が固く凍りついてちかちかと瞬（またた）いていました。
ももたちのすみかは石垣のそばの草むらです。屋根もなくただ枯れ草を丸くしただけです。このような晴れた夜は明け方とても冷え込みます。草むらや木の陰に残されていたわずかの猫たちはその寒さで眠るように死に、日が上るとともにカラスの餌食になっていきました。じぶんたちも今夜にはあの猫たちと同じ運命をたどるかもしれないと思うと、ももは眠ることさえできませんでした。けれども、ももに包まれて眠るかわいい仔犬たちを見つめながら、このこどもたちのためにはどんなことでもして生き延びるぞ、と勇気を奮い起こしました。

ももはおなかがすいてふらふらでした。おなかの芯がすり切れていくような痛みを感じていました。それでもかわいいこどもたちのためになにか食べておっぱいをあげなければ

なりません。
　家々が壊された跡に建てられた作業員の小屋では、今夜は二三人の話し声がしていました。仕事が長引いて軽く腹ごしらえをしているのでしょう。よい臭いに引かれてももは作業員小屋に近づきました。その時です。ももの目の前にどさっとごみの袋が降ってきました。それから作業員の車が出て行くのが見えました。ももは大急ぎでゴミ袋を口で引きちぎりました。
　初めに目についたのはカップラーメンの空でした。内側についた汁をももはぺろぺろとなめました。汁に含まれるネギやニンニクは犬の血液に悪影響があるので、犬は食べてはならないものです。けれどもももはなめました。それしか食べるものがなかったからです。容器の内側がつるつるになっても内側に濡れただけの汁ではおなかはちっとも満たされません。おいしそうな臭いがするので引きずり出すと、それはチーズを包んであったセロファン紙でした。ももはこれもなめました。チクワを包んであった油紙も、醤油の臭いがする割り箸も、食べ物の臭いがする物はなんでもなめました。けれども、どれも中身のないものばかり、ももはいっそうおなかがすいて目が回るようでした。
　その時、小屋の下から走り出たものがいました。ももは反射的にそれに飛びつきくわえていました。それはやせた小さな野鼠でした。ごめんねごめんねと心でつぶやきながらももは口を動かしました。野鼠のからだはももの口のなかでかりかりと悲しい音を立てました。今日の食事はこれだけでした。こどもたちにおっぱいをあげながら、ももは明日にでも自分は死ぬかもしれないと考えていました。そのときはこのかわいいこどもたちも、と思うといたたまれない思いでした。

　十一月になりました。山の季節は早く過ぎ、夜の寒さが身に染みてきました。育ち盛りのこどもたちに栄養を奪われて、ももは肋骨が浮き出て、がりがりにやせ細っていました。それに心配なのは、ももたちが暮らす土地のそばに新たな小屋ができて作業員たちがしばしば出入りするようになったことです。人の出入りが多くなると工事が進み、ももたちの住みかを荒らすことになります。ももはすぐにそのことに気づき、出入りする車や人に片っ端から吠え噛みかかりました。作業員の人達は仕事の邪魔をされ、傷つけられるのですから、この乱暴犬が、と、そんなももを棒で殴って追い払いました。ももは傷ついて足を引きずっても噛みかかりました。
　疲れ果てて谷川の水を飲みに行った時、ももは水に映った自分の姿を見て驚きました。そこに映っているのは、毛を逆立てて目を三角に歪め、げっそりやつれ、身体中傷だらけになった恐ろしい魔物の姿でした。それは、何も信じない、自分さえ信じられなくなった悲しい生き物の姿でもありました。
　ももはどっと疲れて、こどもたちの側に帰ると倒れるように眠り込みました。無邪気なこどもたちは、いっそう出が悪くなったおっぱいに一生懸命むしゃぶりつくのでした。

　そんなある日、危険が迫っていることを感じられる出来事が起こりました。
　すみかのすぐ近くに一台の車が止まり、大きな恐ろしい男二人と女の人が降りてきて、盛んにももに話しかけようとするのです。
　ももは、本能的にこどものいる場所から離れて、以前家が建っていた中では一番高いと

ころへと歩いて行きました。案の定、一番大きな男の人や女の人は釣られてついてきて、ももが草むらに隠れると、見失ったようでした。ところがしつこいことに、ももが枯れ草から姿を現すとまたついて来るのです。

ふと見ると、彼らは首輪と引き綱を持ち、近くに大好きなささみジャーキーを撒いています。ももはすぐに彼らが自分を捕まえにきたことを悟りました。人間たちの中には犬や猫をただの品物のように売り買いし、物のように取り扱う恐ろしい心を持ったものがいることも聞いていました。飼い主のいない動物たちは管理センターというところに連れて行かれて毎日ガス室で殺されていることも。もちろん管理センターの人が悪いわけではありません。悪いのは、飼い主のいない動物たちを作り出してしまう、心ない人たちなのですから。ももにとってはそのようなことはよくわかりません。わかっているのは、いま目の前にいる人間たちは自分たちをひどい目に合わせにきたに違いないということでした。

もし捕まってしまったらこどもたちはどうなるのでしょう。あんなひどいことをする人間に捕まったらむごいめにあわされるに決まっています。でも、ももは空腹なのです。上目遣いに監視しながら、撒かれてある餌を食べました。あんまりおいしくてくうくうと声さえでました。人が寄って来ると、「噛むぞ、うう。」と威嚇しました。

あらかた餌を食べ尽くして久しぶりにおなかがいっぱいになったと安心したのもつかの間、大変なことが起こってしまいました。おそろしい彼らがこどもたちを発見したのです。一番大きな男の人がこどもを一頭捕まえ、女の人が捕まえようとチーズで誘っていました。ももは、疾風のように飛びかかってふたりに力いっぱい噛み付きました。三人は慌てふためいてこどもを置いて逃げ出しました。あんまり慌てたのか、大きなドッグフードの袋を落していきました。袋の破れ目を広げながら、ももは、これで一週間くらいは生きられるだろうか、でもカラスが嗅ぎ付けるとすぐに黒山のようにたかって食べられてしまうだろう、などと考えていました。

それから一週間が過ぎました。再び怪しいことが起こったのです。一台のバイクが風を切って上ってきたかと思うとまっすぐももが隠れている石垣に寄って来て止まったのです。荷台に四角い箱を載せた配送用のバイクでした。運転していたのはこの前噛み付いたあの大きな男の人でした。噛まれた腕には包帯が巻かれていましたが、病院に行って手当てを受けたせいか、ももの口の菌が幸いあまり悪質ではなかったのか、傷はたいしたことはないようでした。ももはそれを見てなぜかほっとしました。

危険を感じて、こどもたちが眠っている石垣の少し上で見張っていたももが飛び降りて、追い払おうとわうわう吠えかかると、男の人は、ももに噛まれないように少し逃げて、そこに、荷台の箱から取り出したももの好きなささみジャーキーを撒きました。それから、ももが気をとられている隙に大きなドッグフードの袋と牛乳パック入りのヨーグルトを降ろし、こどもたちの傍に置きました。

ももは牙をむいて男の人に噛みかかりました。すると男の人はそばに落ちていた棒を振り回して、ももに殴りかかり、ももがひるんだ隙にさっさとバイクに飛び乗って去って行きました。ももは危険が迫っていることを改めて感じましたが、空腹のあまりその怪しい餌を食べ、数日は命がつなげると安堵しました。

そして、さらに一週間後、その日は朝から寒い風が吹き、ももは空腹で目がかすんでいました。作業員小屋そばのゴミにも食べ物の匂いはなく、飢えたカラスたちが群れて仔犬たちを狙っていました。ももは仔犬たちを守ろうと時々わうわうと吠えてすみかの回りを歩き回っていました。栄養が足りないので、もものおっぱいも痩せて、少ししか出ないのですが、ありがたいことに、このごろまたいっそう大きくなった仔犬たちはそろそろ離乳の時期を迎えていました。けれども、このところいっそう、こどもたちの吐く息が臭くなってきたのが心配です。もものおっぱいの栄養分が足りないせいで内臓が弱ってきている証拠です。たとえ離乳したところで、食べるものもないこの山の中でかわいいこどもたちは一体何を食べればよいのでしょう。十二月に入って八日目、ますます寒さが厳しくなっているのです。ももはかすむ目を必死で見開いてこどもたちを見つめました。こどもたちも何かを感じて不安そうにももを見つめました。

「このこどもたちが凍え死ぬのは今夜かもしれない。自分一人なら少しは遠くに餌を探しに行けるけど、こどもたちがカラスやタヌキやキツネなど山の生き物の餌食になるのを防ぐためには自分はここを離れるわけにはいかない。死ぬのならみんな一緒に抱き合ってあの世に行こう。」

ももはそんな気持ちでこどもたちを見つめていたのです。

見上げた空の雲が晴れて、少し日がさしてきました。こどもたちは嬉しそうにはしゃいでいます。カラスも見当たりません。ももは一段上の屋敷跡に何か食べるものはないかと力を振り絞って駆け上がりました。

その時、すぐ下の空き地に車が停まりました。いつかの大きな男のひとともう一人の男の人、それに女の人がひとり降りたかと思うと、一番大きな男のひとが仔犬たちに近づくなり両手で二匹をわしづかみにして車の中に運び込んだのです。ももはあわてて駆寄って吠え、噛みかかりました。ところが一番大きな男のひとが長い棒を振り回し、ももを追い払うのです。おなかがすいて動きがにぶくなっているももが、こどもたちに近づけないうちに、彼らは石垣の間に残っていたこどもたちを抱えて車に運び込み、車はそのまま発車してしまいました。あっと言う間の出来事でした。

「私のかわいいこどもたちが殺されてしまう。あんなに大切に守っていた、いとおしい私のこどもたちが。」

ももの胸は張り裂けそうでした。疲れて足を引きずってすみかに戻ったももの目にたったひとつ救いが見えました。それは、ももが大好きなささみジャーキーと大きな袋からこぼれだしているドッグフードでした。今の人達があわてて落していったに違いありません。ももは吠え声をあげながら狂ったように食べました。やがて、ももは深い眠りにつきました。目にいっぱいの涙を浮かべながら。

ももの絶望的な日々が続きました。「こどもたちはもうガス室で殺されただろうか。」と毎日そのことばかり考えて、ももはいっそうやせ細っていきました。

十二月も半ばを過ぎて、寝る草もぱりぱりと凍りはじめました。ももは、昼間は作業員を避けて壊れたかまどのそばの草むらにいましたが、夜はそっと作業員小屋の床にもぐりこんで寒さを避けました。気持ちが沈んだだけ身体も弱り、もう歩くのもやっとで、足を引きずっていました。

年末近く、十二月二十六日のことでした。よろよろと足を引きずって歩くももの目に、また、あの怪しいバイクが映りました。ももはわうわうと吠えましたが、もう駆け寄って噛みにいく元気も無く、遠くからかすれ声でわうっと鳴くだけでした。バイクの男の人は、餌の袋を降ろし、ももに見えるように道端に置きました。それから長い間しゃがんでももを見つめていましたが、もちろんももは近づこうとはしませんでした。作業員の小屋から、「明日から雪だそうだぜ。」と怒鳴る声が聞こえてきました。大きな男の人は寒そうに身を震わせ、バイクにまたがって夕暮れ迫る山道を去って行きました。

翌、十二月二十七日、寒さがいっそう厳しくなることを知らせる小雪が舞い始めました。

ももが高台の石垣の草むらでまどろんでいますと、下の広場にブルーの軽自動車が止まりました。降りてきたのは、きのうバイクで来たあの大きな男の人と、以前ももが噛み付いた女の人でした。ふたりは手際よく金属の檻を降ろしました。ももはすぐに気づきました。その人たちが自分をさらいにきたことを。ももがやっと入れるくらいの大きさのあの檻に入れられたら、もう二度と、生きて走り回ることはできないかもしれません。

警戒するももはそれでも、そこを離れて遠くへ去って行くことはできませんでした。なぜなら、そこはももの土地だからです。今ではただの枯れた雑草が生えているだけの淋しい荒地ですが、その石垣に囲まれた小高い土地は、ももが何ヶ月もひとりで守ってきた大切な場所なのです。優しい村の人たちと、かわいいこどもたちの思い出がいっぱいつまったこの土地を見捨ててどこかへ行ってしまうなんて、ももには思ってもみないことでした。それよりも、怪しい人たちがこの大切な場所を荒らしたりしないか、それが一番大切なことでした。ももは檻を遠巻きにして、うろうろと見張りました。少しでも怪しい動きをしたら噛み付いてやると身構えながら。

ところが悲しいことにももの身体はもう限界でした。こどもたちにおっぱいを与えなくてよくなったぶんだけはエネルギーを溜めることができましたが、すでに内臓のすべてが弱り、意識も途絶えがちでした。昨夜は久しぶりにドッグフードを食べたはずでしたが、身体のどこかがしびれているようで、飢餓の震えが波のように全身を襲うのです。

男の人は檻の傍にじっとしゃがんでいます。まるで石になったようです。枯れ草をわたる風のかさかさという音に混じって、かすかにふもとの町の、正午のサイレンの音が聞こえてきました。もう一時間以上も、男の人は固まったままなのです。ももは不思議に思って男の人に近寄りました。鼻でつついてみてから足を軽く噛んでみました。男の人はぴくとも動きません。

檻に近づくと真ん中にはおいしそうにゆでられた豚肉がよい香りを漂わせています。その周りにはささみジャーキーが撒かれています。ももは男の人の様子を横目で見ながら、檻の隙間から一枚のジャーキーを引きずり出して食べました。舌がとろけるようでした。その時、男の人が少し動きました。ももは一目散に遠ざかって、石垣の下にしゃがみこみました。ももはまたじっとして様子を窺っていました。

さらに一時間が過ぎ、男の人はずっと石になったままでした。雪交じりの風に乗って、豚肉の香りが漂ってきます。この数ヶ月、そんなにおいしいものは食べたことがありません。ももは、男の人の様子を注意深く観察しながらじりじりと近づいていきました。豚肉

は檻の真ん中にあります。男の人が石になっているのを確かめて、ももは檻の入り口から身体を半分入れました。
その時、ふいにおしりをどんと突かれて、後ろでがちゃっと檻の扉が閉まりました。ももの身体に恐怖が稲妻のように走りました。男の人は大きな声で、なんと、「とった。」と女の人を呼ぶのです。ふたりはさっさと檻を車に積み込みました。新しい車の匂いがつんと鼻を突きました。
気配で作業員小屋から出てきた人が言いました。
「かわいそうだけど、そんな乱暴な犬は早く処分してくれよ。村の人はももと呼んでいたけど、なんのなんの恐ろしい犬でね。何人噛まれて病院に行ったことか。」
「もも、ですか。」
その声を聞くなり、車はあっという間に急発進しました。

四　もものしあわせは

ももの入った檻は、床が滑りやすいうえに少し傾いていました。曲がりくねった山道で車が揺れるたびにももはつるつる滑り、すっかり疲れ果てていきました。ももは逃げ出そうともがきましたが扉は冷たく閉じられたままでした。途中、地元の野菜などを売っている店に止まって、カップに入った水が差し入れられましたが、ももは到底飲む気持ちになれず、恐ろしさでぶるぶる震えるばかりでした。
車は一時間くらい走ってから都会の住宅地の、一軒の家に到着しました。ももの檻はどすっと降ろされ、ガラスばりのベランダの、コンクリートの床に置かれました。ガラス戸一枚の半分外のようなところでしたが、それまでの山の寒さを思えば、別世界のように暖かく感じられました。ももは恐怖でこわばった身体でわうわうと低く吠えていました。
ミンチを煮込んだような餌が入れられましたが、わうと威嚇しただけで、全く口をつける気がしませんでした。おしっこもうんちも、全くしたくなりませんでした。そのようなことが続くと、死んでしまうのですが、ももはそれでもよいとさえ思っていました。

夜もふけて、ももは疲れてぐったりと倒れていました。何も食べず、何も出さず、あけがたまでには死んでしまうかもしれないと思いました。
そのとき、いっそう恐ろしいことが起こりました。あの大きな男の人がいつのまにか檻のそばにしゃがみ隙間から手を入れてももに触ろうとしているのです。ももはすかさず、わうっと噛みかかりました。噛まれた手は慌てて引っ込みました。ところが手はまた入ってくるのです。ももはまた噛みかかりました。手にはうっすらと血が滲んできました。
噛まれれば手はすぐ引っ込むのですが、また入ってくるのです。とうとう、疲れているももはあきらめました。もうどうなってもよい、と力なく横たわっていました。頭の中では悲しげにももを求めて泣いている仔犬たちの幻がくっきりと浮かんでいました。

そのうちに、手はももの背中をなではじめました。骨の芯まで溶けてしまうような優しい揺するようなマッサージでした。ももの凍っていた心がゆっくり融けていく感じが身体

いっぱいに溢れてきました。ももは半分眠ったような気分で、背中や首筋や頭をマッサージする手のぬくもりを感じていました。長い間こんな感じを忘れていました。ももの頭には、村中の人たちがいつもやさしくなでてくれたあの半年前までの感覚がよみがえり、美しい村の風景が浮かんでいました。ももは、緊張と恐怖の連続でかちかちに凍り付いた氷の塊のような心と身体（からだ）がほぐれていくのを、温かく感じていました。うとうとと幸せな長い夢を見ているようでした。

それから何時間マッサージされたことでしょう。ももは、何ヶ月ぶりかにゆったりした気持ちで眠りについていました。一度、そっと檻の戸が開けられて、かちっと首輪をつけられたようでした。そのとき、かすかに「まん丸な目になったね。ありがとう。」と言う声を聞いたような気がしましたが、夢だったのでしょうか。

「わあっ、かわいい犬に変わった。」
ももはびっくりして立ち上がりました。大きな声は、あの恐ろしいと思っていたお姉さんでした。

「もも、もも。かわいいもも。」

ももは耳を疑いました。なんてやさしい声で名前を呼ぶのでしょう。名前を呼ばれるのは何ヶ月ぶりでしょうか。

ももは、すっかり嬉しくなり、首をかしげてしっぽを振りました。

その時不思議なことが起こりました。二階のほうから聞き覚えのあるこどもたちの声が聞こえてくるのです。連れて行かれた時よりもずっとしっかりした大きな声が。もう二十日も前に連れて行かれた仔犬たちは、この家の二階ですくすく大きく育っていたのです。ももは思わず「くう。」と鳴きました。

「まあ、かわいい。ほんとはこんなにかわいい犬だったのね。」

お姉さんは首にしがみついてくれました。

「ももの赤ちゃんはね、大切に育てているよ。こうしなかったら、みんな死んでいたでしょう。お医者さんに行って病気の予防注射もしてもらったよ。すぐももに会わせたいけど、ももの予防注射が済んでからね。でも、こんな事言っても、ももには分からないかな。」

ももには分かりました。言葉は分からなくても、その意味はよく分かりました。

この家の人たちが自分たちのことをどんなに大切に思ってくれているかが。

おとうさんと呼ばれている大きな男の人が、ももの首輪に引き綱を付けようとしました。一瞬たじろぎましたが、ももは、もう一度人を信じてみる気になっていました。頭や背中をさすってもらいながら、ももは、引き綱を取り付けるのを素直に受け入れました。おとうさんは言いました、「ありがとう。」と。

五十メートルほど歩いたところに小さな公園がありました。ももは慌ててかけこむと、一日ぶりのおしっこをしました。「よくできたね。」と、おとうさんは頭をなでてくれました。

公園の奥に一段高いところがあって、そこには、一本の若い桜の木を囲んで日当たりのよい芝生がありました。たくさんの犬の匂いがしました。犬にとって気持ちの良いところです。段の端っこに行くと急におなかが動いて、自分でも驚くほど大きなうんちをしまし

た。褐色の血にまみれた、表面がどす黒い色で覆われた固いうんちでした。あまりの飢餓に、自分の腸を消化し始めていた色でした。
「あぶないところだった。」と、おとうさんはひとり言を言いました。
ももはどっと疲れて、すぐに帰ろうとしました。おとうさんは気づいて急いで帰ってくれました。それからももは、ベランダの毛布の上で、久しぶりにゆったりと、長い長い夢の世界に入りました。

それから一年以上の月日が流れました。
ももは体重が二倍近くになりました。もしかしたら少しダイエットが必要かもしれません。おうちのひとの姿が見えると、くうくうと吠えながらすばやく駆け寄って、腰に跳びついて甘えます。
そんな時、大きなお姉さんは「もも、お山にいたとき、次々にいろんな人が見に行って怖かったでしょう。どうしたら連れて帰れるのか、みんなに相談していたのよ。早く連れて帰れなくてごめんね。」と目をうるませて抱きしめてくれます。
ももものこどもたちは、犬のようになって一緒に遊んでくれるおとうさんと、よく散歩してくれるお母さんと、世話好きな大きなお姉さんと、もうひとりの一緒に走ってくれる優しいお姉さんに囲まれて大きく育ちました。この家に来たころは内臓が弱って臭い息を吐き、下痢をしていたのもすっかり直って、今では元気すぎる吠え声をあげて遊びまわっています。
それぞれの姿形や性格は違いますが、右巻きのしっぽを回して振るのだけは、みんなももゆずりです。
黒いまだら模様の活発な男の子は「ごろ」です。五郎兵衛山村の一番上の字「ご」をつけたのです。ももよりもずっと大きな猟犬のような姿の犬になりましたが、姿に似合わず甘えっ子で、ベランダや庭にいてもガラス戸越しにジャンプして、いつもおうちのひとの姿を探しているのです。
あとの三頭はももと同じように白いのですが、それでも姿や性格は違います。
耳が立って毛がもこもこっとして元気に駆け回るのは「もこ」といいます。とても賢く冷静で、はしゃぎ回るごろを横目に静かに休んでいたかと思うと、おもちゃや木切れをくわえておとうさんやお姉さんに見せに行ってはほめられるのです。困ったことには高い棚や温室の上にすぐに登り、柵のかんぬきを前脚で上手に開けるのです。
耳がたれて少しのんびりしているのは、五郎兵衛山の一番後ろの字「ま」をつけて「まろ」といいます。まろは男の子のなかで一番小さいせいかよくきゃんきゃん泣いていましたが、このごろはだいぶ強くなってごろやもこを追い回すようになりました。まろはとてもやさしいのです。この家には前から、薄茶色なのに「しろ」という名の大きな犬がいました。さらに、ももたちが来てからまもなく、齢老いたからといって公園に捨てられていた、茶色の、毛が長く目がまん丸な老犬もいます。迷っていたとき、ぬかるみに足を突っ込んで靴下をはいたように汚れていたので「くつしたちゃん」と呼ばれています。この二頭は男の犬ですから、ごろたちとはライバル、いつもわんわんと吠えあって、家族の人はご近所にきまり悪そうですが、ご近所のかたがたも優しく見守って下さっています。不思議なことに、まろだけは、この二頭と仲良く遊ぶのです。特に齢をとってあまり活発には

遊べないくつしたちゃんの面倒をよくみて、身体をなめたり一緒に寝たりするのです。でも少し甘えが過ぎるところがあり、人が寄っていくとすぐに裏返ってピンクの腹を見せ、長い舌をべろべろ出すので「みっともないよ。」と言われます。
　そしてただ一頭の女の子は、村に咲いていた花のように愛らしいので「はな」と名づけられました。はなは、お母さんのももと同じように小柄な中型犬で頭が良いのですが、毛並みはお母さんとは違ってふさふさとして、尻尾はダンスのポンポンを付けているようです。お母さんゆずりの活発さで、少しおてんばです。以前は他の男の子たちに噛みついて遊びましたが、いまはもうベランダや庭で暮らす男の子たちとは別に、お母さんといっしょに二階で暮らしています。お母さんと一緒なのに、人がいなくなるとすぐにぎゃんぎゃんと騒ぐ甘えっ子です。

　ももとはなが、他の犬たちに隠していることがあります。それは、夜寝るときはいつも、おとうさんの布団の上だということです。はじめは、はなが騒がないようにと、おとうさんがももたちの部屋で布団を敷いたのですが、ももとはなは上手に布団のでこぼこにはまり込んで暖かく寝ることを覚えてしまいました。ももは、布団の上で太く丸くなったおなかを裏返して甘えます。おとうさんは、ももが冷たく固い土の上で長い間つらかったのだから、せめて今は暖かくやわらかい所で寝かせてあげようと思っているようです。布団はしっかり消毒しないと、犬とひとと両方に良くないとかで、いつも陽に当てて良く乾かしてあります。それがまた気持ちよいのです。

　ももは、ひとつだけ気になっていることがあります。それは、おとうさんが時々ももに「ありがとう。」ということです。ご飯をもらい、散歩に連れて行ってもらっているのはももの方なのに、なぜだろうか、と考えます。おとうさんが散歩の途中で、同じように拾った犬を連れた人と、「どんな人も、生き物も、山や、海や、風でさえ、何か生きるのに大切なことを教えてくれますね。」と話していたことと関係があるのかもしれません。

　数年後、そんなある春の日のことです。おとうさんが言いました。ちょっときびしい声でした。
　「みんなでドライブに行こう。でも今日だけは、しろとくつしたちゃんはお留守番。」
　しろはいつも一番に連れて行ってもらえるのにと不満そうでしたが、賢い犬ですから、何かわけがあるのだと気がついて、素直に自分の小屋に戻りました。大好きなチーズを貰ったせいかもしれませんが。
　すっかり弱くなったくつしたちゃんは日当たりの良い庭ですぐに眠りはじめました。

　ももと四頭の仔犬たちを乗せた車は緑まばゆい谷に入りました。桜並木の曲がりくねった道を抜けると、急に明るく広い、真新しい道に出ました。
　やがて、きれいな水をいっぱいに湛（たた）えた大きなダムの上に出て、車がゆっくり止まったとき、ももは気が付きました。

　この水の下に、あの美しい村が沈んでしまっていることを。

やさしいおばあさんや村人たちみんなの生活も、なつかしい歴史も、大きな楠の木に包まれた五郎兵衛神社も、古いかまどでおいしい豆腐料理を作っていた家々も、桃の花の下で村人たちと暖かく楽しく暮らした思い出も。

そして、わが子を守って命がけで闘った悲しくすさまじい一日一日も。

何もかもみんなみんな、深い深い水の底に沈んでしまったことを。

もものつぶらな瞳からは涙がこぼれ落ちて止まりませんでした。

おしまい。

最後に

このものがたりを書くために取材を重ねるにつれ、やはりよく似たものがたりを思い出してしまいました。ひとつは映画の「南極物語」（1983 年、蔵原惟繕監督、日本ヘラルド映画、東宝）で、もうひとつは「山古志村のマリと三匹の子犬」（2005 年、桑原眞二・大野一興、(株)文藝春秋）です。どれもすばらしいものがたりですが、その感動の後ろに、厳しい環境にとりのこされた犬や動物たちがどれほど過酷な生き方を強いられ、多くの動物たちが死んでいったことか。これらのものがたりはそのようなことを訴える点で共通しています。これらのものがたりにはたしかにやむをえない事情がありましたが、それとほ違って、一生懸命人に尽くして、人を待ち続け、人の愛情を信じ続けて、むごい死に方をさせられる生き物たちも多く耳にします。私たちはそのことをもっと真剣に考えないと、結局は自分たち自身を滅ぼしてしまうのではないでしょうか。

もちろん、このものがたりの人間たちが常に正しい判断ができているのかについては、本当のところは分かりません。噛まれても噛まれても撫でてあげる背景には、はじめに噛まれた時に病院に行って、現在は狂犬病の可能性はほとんどないこと、噛まれた傷が治療の甲斐もあってほとんど化膿しなかったこと、などの裏付けがあってのことです。それでも知らないことだらけの人間です。ももがその時その時を必死で生きたように、人間たちもその時その時で一生懸命に考え判断しました。

このような努力を続ければ方法はきっと見つかるはずです。すでにそれに踏み出している国々もあり人々もいるのですから。肉を魚を、生き物を食べてはならないというのではありませんが、すべての命を大切にすることから考え始めなければならないのではと思います。そこから出発してみたいと思います。

[Story of Momo]
[Inuni・新短歌人連盟同人・芸術と自由社同人]